

10年前、毛皮を着るなんてとんでもないこと、だった。スーパードモデルが動物愛護団体の広告に出て「毛皮を着るくらいなら裸のほうがまし」とまで言ったり。

ところが。国際毛皮連盟のデータによると、00年あたりから毛皮の売り上げが上昇し続けている。

それでもファーは生き残る

反対だったスーパードモデルは何事もなかったかのように着ているし、今冬の売り場を見渡せば毛皮をあしらった服や小物が花盛り。いったい、これはどういうことなのか？

「21世紀に入るとともに、地球環境問題への関心が高まり、天然素材としての毛皮が見直され始め

てきた、ということがあります」

そう教えてくれるのは、日本毛皮協会の事務局長、森明美さん。

「流れを変えたのは、プラダですね。00年秋冬コレクションにファーのティペット(襟巻き)を発表すると、次の年にはルイ・ヴィトンがミンクのポンポン……とフ

ランドが続々、ファーを使うようになっていきました」

ファーは資源の持続可能な有効利用を実現する天然素材、という認識に、ブランドのリッチなお墨付きが加わって普及を促した、という図が描けそうである。

とはいえ、毛皮に対する抵抗を表明する人は、今でも少な

コロモのココロ

中野香織の

い。そんな抵抗を意識してかどうかは定かではないが、実際に売れているのは、総毛皮のコートよりもむしろ、縁どりにファーをあしらったコートなど、ポイント使った製品だそう。

総毛皮にしても、ニット加工などが施された、生々しさから遠いファーがトレンドの先端をいく。ニットイングとは、網状の生地を細く切った毛皮を編み込んでいく加工方法。昨年、ルイ・ヴィトンがこの手法で仕上げたコートを発表して話題になった。

手を加えられ、愛でられ、時には小麦粉をぶつけられながらも、時代にあった新たな意味と形を得て生き続けるファー。やがて土に還るところまで、人の運命にも喩えたくなくなります。(服飾史家)